

## ロシア語ブルガリア語比較研究

## 時制論—過去時制—

山 田 勇

## 1. 緒 言

小論の趣旨はロシア語とブルガリア語の過去時制，特にブルガリア語でいうところのアオリスト（完了過去），インペルフェクト（不完了過去），ペルフェクト（不定過去）を中心にこれらを，ロシア語の該當時制の事例に徴して，比較検討することにある。著者はこれまでも，ロシア語のアスペクトについて一定の管見を得たが [山田 1973]，これに加えて，従来の見解を紐解きながら行論する。

動詞の時制については，これまでも各様の論議がなされてきたが，これを約言すれば，以下のようなだろう。その一は，時制を，意志伝達理論としての法，アスペクト，テンスの各範疇での位置づけとして，把握しようとする立場であり，その二は，時制が文法上の一範疇とはいえ，あくまでも現実の時間との関わりを，優先させながら，ア・ボンダールコのように，言語外の発話時と文法的発話時とを区別する必要性を重視する立場である [A. B. Бондарко 1970]。更に最近の研究思潮として，この様な範疇を意味論の視点から立論しようとする試みが顕著になりつつあることがあげられる。国広 [1995] は「言語体系にせよ，言語使用面にせよ，言語とは別の認知能力の影響を大きく受けている」として，小論の主題の一であるアスペクトの観点を，語彙論形態論ともども，シンタクシスの範疇をも加味して，「アスペクト的認知」理論として論究することの必要性を説いている。この様な視点から，ロシア語とブルガリア語にお

ける時制のメカニズムを過去時制を中心に考察する。

例文：<sup>(1)</sup>

1) ペトロはパウロ教会の夕べの祈禱式の終わるのを待っていた。

и *ждал*, когда кончится всенощная в церкви Петра и Павла.

и *чакаше* да свърши вечернята в черквата „Св. Петър и Павел”.

2) いきなり彼は (中略) どんなに長いあいだ待ったかということを話したか  
った。

Ему вдруг страстно захотелось... рассказать, как он долго *ждал* ее.

Изведнъж страстно му се прииска да... да ѝ разкаже колко дълго я е *чакал*.

3) そしていまは誰もがその再発を気づかっているのだった。

и теперь все *ждали* возврата болезни.

и сега всички *чакаха* възобновяването на болестта.

例文中の動詞は何れも直訳すれば、「待つ」を意味するロシア語の動詞 *ждать* とブルガリア語の動詞 *чакам* である。アスペクトはロシア語・ブルガリア語の動詞それぞれ、不完了体である。しかしロシア語の動詞は過去時制が一種類であり、ブルガリア語の動詞のそれは四種類あるので、ロシア語の動詞の場合の時制「過去」の有する意味内容は、言語表現の外にも求める必要がある。むしろこのことはロシア語に限ったことではなく、状況は日本語における過去の表現「た」「ていた」とも符合する。さて、ブルガリア語の場合上から順に①インペルフェクト、②ペルフェクト、③アオリストの過去時制である。①は「過去の或時点で進行中の行為、過去の反復行為」を意味し、②、③はそれぞれ「過去の行為の現在での残存、現在までの反復、継続」、「現時点以前の決まった過去時点に行われた行為」を意味する。つまり、ロシア語の動詞の過去はブルガリア語でいう「過去」から「現在」に至る全ての時間帯を、特定の視点に焦点を合わせることなく行為や状態の様態に応じて表現する。ここに言語の持つ宿命が看取せられるのである。如何なる言語も器としての形式を有しており、言

(1) 例文は原則としてチェーホフの作品「三年」から採った。原文については [チェーホフ 1988] [A. П. Чехов 1977] [A. П. Чехов 1988] の順に記載する。下線は筆者のもの。

語によって表現しようとする、言語外の現象は一致していない。言語分析に欠かせないのは、言語を取りまく環境の全てを考察の俎上にはのせることである。茲に認知論的な接近の必要性を認めなければならない。

2. 時制の範疇は本来、認識主体が生起させる動作の瞬間と言語上の表出形式の関わり方（先行性、同行性、追尾性）を説明する。元来、過去、現在、未来といった時制の区分は人間の実在の各瞬間に対する自覚として捕捉されるもので、悠久の時の流れを認識主体がどのように非連続な時間に区切るかという命題に関わる。その区分の仕方が世代を通じて続けられる結果、容易なことでは普遍的な時制の区分は確立され得ないのである。斯様な事実は、換言するなら、或る時制に対して認識主体がとる態度の特徴について解明する事を意味しているに他ならず、而して時制とアスペクトとの関連の探究が求められる。[山田 1973]

ヴェ。ヴェ。グレーヴィチ [В. Гуревич] は次の様に述べている。

『体の範疇は動作の瞬間に対する先行性、追尾性、同行性といった意味を含むので、時制の範疇と大変近い関係にある。然るに、時制の範疇では発話の瞬間（絶対的瞬間）が重要である。体の意味は時制を絡うことに因って、それら相互の関係で補足的に動作を特徴付けることになる。』

イ。カ。ブーニナ [И. К. Бунина 1970] はブルガリア語は名詞の活用が歴史的に見て著しく変化し、スブラ語の共通する特徴である名詞格変化を失ったが、それに比べて動詞は古代においても現代においても同じ時制の下に活用してい

(2) テキストで完了体が発話の「焦点」を表現し、不完了体が「背景」を連続して記述している例をあげる。

人びとはなお急ぐようすもなく歩いていて、話したり、窓べにたたずんだりしていた。

— а народ все шел, не торопясь, разговаривая, останавливаясь под окнами.

— а хората продължаваха да вървят, без да бързат, разговаряха и се спираха под прозорците.

だが、ようやく、ラブチェフはなつかしい声を聞きつけた。

Но вот, наконец, Лаптев услышал знакомый голос,

И его най-сетне Лаптев чу, познания глас,

ると説明している。他のスブラ語は時制の変革，縮小が著しい。一方ブルガリア語の動詞にも最近，変革の波が現れた。伝聞法の出現である。

3. 小論では，ア．ペ．チャーホフの作品「三年」のテキストにロシア語とブルガリア語の翻訳での動詞の使用状況を過去時制について分析する。

ロシア語は一般的には，時制とアスペクトが組み合わされて現象を表現する。その概要を図で表示すれば以下ようになる。勿論，時制にはそれぞれの範疇に跨るような機能も，存在する。歴史的現在，その一例であり [金田-1994]，また，過去時制が，法の範疇の「命令」を表す機能も見られる。

ロシア語では，時制は過去時制対非過去時制の二項対立として捉えられる。

体/時制	過去	現在	未来
完了体	+	-	+
不完了体	+	+	+

第1表

不完了体は過去時制で動作を非限定的に表現し，完了体は限定的に表現する。しかも不完了体は完了体に対して現在との断絶のニュアンスが著しい。不完了体が歴史的現在として用いられるのはこの為であると考えられる。さて，上記の表では完了体の現在が未来の意味に用いられるため，一となっている。これは「過去時制を主要な時制と位置づけ（有標），それ以外を非過去時制（無標）」とする従来の立論にその淵源を見いだし得よう。その際，未来時制は現在時制の一部として歴史的に解釈せられている。

井泉 [1956] は未来は現在の範疇であるとし印欧語においては，回説形からの発展形と見なしている。日本語も本来，単なる未来形はないが，「明日，うかがいます。」は第1表に明らかなように，ロシア語の完了体現在が，未来を意味するのと軌を一にしている。ブルガリア語においても未来は，本来，*хотя* + 不定法（したい）という現在形の表現であった。それが，時代と共に完了体へと肩代わりされたものである。

さて、ブルガリア語の動詞には次の9の時制がある。1. 現在, (сегашно време) 2. 完了過去, (минало свършено време) 3. 不完了過去, (минало несвършено време) 4. 不定過去, (минало неопределено време) 5. 過去完了, (минало предварително време) 6. 未来, (бъдеще време) 7. 未来完了, (бъдеще предварително време) 8. 過去未来, (бъдеще време в миналото) , 9. 過去未来完了 (бъдеще предварително време в миналото) である。このうち、テキストに用いられた主要な時制は1. から6. の6種類であるが、過去完了と未来は頻度が低い。他のスラブ語と同様にブルガリア語もまた体の範疇を有している。完了体と不完了体である。しかしロシア語のようにこの二つの体と九つの時制はロシア語の場合のように、マトリックスの図が描けるわけではない。例えば動詞「読む」はブルガリア語では *чета* であるが、この動詞は過去時制で二つの「読み方」を意味する。その第一は進行形の「読んでいた」(*четях*) であり、他方、「読んだ」を意味する単純過去(*четох*) としても用いられる。この例では二つのケースが現在時制では同音異義語として機能するが、それぞれ別の形をとるものも多い。例えば、

Вчера ние *минахме* покрай лозето им. (БТР)

昨日我々は彼らの葡萄園の側を通った。

Годините *минават*. (БТР)

年月が過ぎ去る。

例文中の *мина*, *минавам* はともに「通過する」を意味する動詞であるが、これらはロシア語の完了体、不完了体に相当する。

ある範疇は同様にして完了体、不完了体双方から形成される。例：未来時制 *ще чета*, *ще прочета*; 被动形動詞 *четен*, *прочетен*; 命令形 *чети*, *прочети*; しかしアオリストは主として完了体動詞から形成され、インパーフェクトは主として不完了体から形成される。能動形動詞現在と副動詞は不完了体から形成される。

ロシア語と同様に、ブルガリア語の動詞で、接頭辞のないものは、基本的には不完了体に属する。例：*говоря*, *живея*, *спя*。しかし、およそ50のこの種の動

詞は完了体である。例：дам, даря, кажа。以上のような動詞では、体の転換が見られる。例えば、動詞 видя は以前、不完了体に属していたが、現代では完了体としても用いられ、動詞 плюя, вържа, пазаряя-ирам に終わる動詞も二つ<sup>(3)</sup>の体で用いられる。

4. ブルガリア語の過去時制のうち「アオリストは絶対時制でインパーフェクトは相対時制という動詞の単純過去を区別」する立場とこの見解の欠点を補う意味でアスペクト理論へ発展させる見解がこれまでに出版されて来たが、確たる結論を得るには至っていない。それは、体論者達が完了アオリストとインパーフェクトの対立と完了不完了体の対立のもととなる意味上の示差的特徴を言語外の現象をも含めて、精密に作ることに失敗しているからであるとされる。

エ. イ. デミーナ [E. И. Демина 1993] は、イ. ホリトの説を引用して、「活用による体（アオリストとインパーフェクト）は行為の現実の境界の有無を、またシンタグマ（回説形）による体（完了・不完了体）は潜在的な限界の有無を表す。」

例：

ところが、ユーリヤ・セルゲーエヴナがひとりでなく、どこかの二人の婦人といっしょだったので、がっかりした。

и оттого, что Юлия Сергеевна была не одна, а с каким-то двумя дамами, им овладело отчаяние.

но тъй като Юлия Сергеевна не беше сама, а с някакви две дами, го обзе отчаяние.  
ラープチェフは瞳をこらして、黒い人かげに見入った。

Лаптев с напряжением всматривался в темные фигуры.

Лаптев напрягнато се взираше в тъмните фигури.

あの人はわたしを愛してなかったんだわ、口にこそ出さなかったけどね。

Он не любил меня, хоть и не высказывал этого.

Не ме обичаше той мене, макар и да не го е казвал.

(3) С. Б. Бернштейн Болгарско-русский словарь Изд. «Русский язык» М. 1986 стр. 756

二カ月ほど前に、姉は癌の手術をして、  
 Месяца два назад у его сестры *вырезали* рак,  
 Преди два месеца я *бяха* оперирали от рак

という考え方を分析の出発点に据え、特にアオリストとインパーフェクトの範疇に注目しつつ次のように述べている。「アオリストとインパーフェクトの対立の体の意味論的な特徴である全一性、非全一性、行為の過程は必ず、関係発話において発話の瞬間に関して一定の過去の時期に関与する話者と関わる。換言すれば、アオリストとインパーフェクトの対立における行為の体による記述は関係の伝達内容とその参加者とにいつも関連する。記述は関係の動詞形の意味で当該の話者が考慮している過去の一定の時期だけに効力がある。」これは過去時制という文法範疇を解析する際に、現象を総体的なものとして捉える立場である。筆者 [山田 1973] もまたこうした分析の必要性を次のように強調した。主体が認識する時制の区分と、客観的な過去、現在、未来という区分とが、単に機械的な対比による平行関係にない。各社会社会に固有な時制の把握の型は、言語として、就中、文法範疇において伝承されているのであるから、各言語について時制の把握のパターンを詳細に分析する必要がある。この場合、考察の主眼は単純な時制についての検討にあるのではなく、先に論述された様に、特に認識主体がその時制とどのような心的態度で接しているかという点、換言すれば現象参加者の気分の問題に言及しなければならないのである。

それでは、得られた資料から、①活用による体（アオリストとインパーフェクト）と②シンタグマ（回説形）による体（ペルフェクト・過去完了）を対比させる形で分析する。まず①に関してはロシア語の動詞とブルガリア語の動詞の「体の競合」<sup>(4)</sup> [山田 1972] について考察する。次に②に関してはロシア語の動詞とブルガリア語の「体の共存」の持つ意味について考察する。

(4) 競合という用語はチェコ語の KONKRENCE VIDŮ の翻訳であり、V. Mathesius による。

例：アオリスト

1) 弱々しい、ささやくような声で言った。

и *продолжала* слабым, беззвучным голосом:

и *продължи* със слаб, беззвучен глас:

2) 彼女は、ちょっと黙ってから、つづけて言った。

— *продолжала* она, помолчав немного.

— *продължи* тя, като помъла малко.

3) そして、姉が夜よく眠れるようにするためにはどうすればいいか,

он спросил, что *делать*, чтобы сестра спала по ночам,

попита какво да *се направи*, за да спи сестра му ношем,

最初の二例はいわば脚本の地の文にあたるものである。この文は直接話法乃至思索を意味する文と地の文から構成されている。この場合、後者に含まれる動詞のアスペクト選択の条件は前者の内容に依存する。発話が完了しているのであれば、例：

「けさお見舞いに行ってきましたのよ」とユーリヤ・セルゲーエヴナは言った。

— Я была у нее сегодня утром, — *сказла* Юлия Сергеевна.

— Бях при нея тази сутрин — *каза* Юлия Сергеев.

地の文中では完了体が使用され、命題が内省的思惟的な場合には、

「ああ、ひどいや、ひどいや！」と、彼は嫉妬しながらつぶやいた。

《Это ужасно, ужасно! — *шептал* он, ревнуя ее.

— Това е ужасно, ужасно! — *шепнеше* ревниво.

不完了体の動詞を含む地の文が構成される。取りあげた最初の二文では体の競合が観察される。上例からも分かるとおり、ブルガリア語の動詞を含む地の文ではアオリストで話者が過去の一時点を発話行為の原点に定められるので、そのように意識する場合には、完了体が使用可能となる。これに対してロシア語

では過去時制は現在時制に比べて現在との隔絶を意識させるため、このような意識が起り得ず、不完了体過去が使用される。

文3)では「どうすればよいか」、という意味の動詞の不定法の文でロシア語とブルガリア語の動詞に競合が見られる。ブルガリア語では過去時制の弁別が細かくなされるため、現象に即して未成就の行為を完了体で記述すればよいのに対し、ロシア語ではこの現象を一般化して捉えるので、不完了体として表現するのである。この種の不定法構文では、名詞化がしばしば見られるが、特にブルガリア語の動詞には不定法が存在しないため、この現象が一般的に観察される。その際に、名詞が完了体、不完了体双方から作られるが、その根拠はシンタクシス機能から導出される。

山口 [1981] はスラブ語の行為名詞について次のように推論する。「スラブ語に広くみとめられるところの、*-ние* 及び *-тие* に終わる行為名詞は、\**-no-*、\**-to-*、によって構成される被動形動詞の語幹を、更に接尾辞 \**-ije-*、によって延長したものであるというのが、定説となっている。この種の行為名詞は意義的に動詞的色彩が極めて強く、また自動詞からも他動詞からも自由に派生することを得たところから、古代のスラブ語において格変化を行わない不定法に代わって広汎な使用をみたのである。(中略)これが自動詞から派生された場合に能動の行為を表すことは当然であるが、他動詞を派生原基とする場合にも、相的意義に関しては、能動・被動の両様に用いられ得た。たとえば、

6) и егда поржгашасямоу съвлѣкошѣ въ ризы своѣ, и  
ведошѣ | въ ризы своѣ ѣ vedoшѣ | на распяtie (Sav. Kn. p. 111. 15)

Καὶ ὅτε ἐ νέλαιξαν αὐτῷ ἐξέδναν αὐτὸν τὴν χλαμῦδα καὶ  
ἐνέδνσαν αὐτὸν τὰ ἱμάτια αὐτοῦ καὶ ἀπήγαγον αὐτὸν εἰς τὸ  
σταυρῶσαι

「こうしてイエスを潮弄した拳句、外套をはぎとって元の上着を着せ、それから十字架につけるために引出した。」

このことからこれらの行為名詞の派生原基となった \**-no-*、\**-to-*、の形が、スラブ語において本来、相に関して中立であったのではないかとする考えも成立

つであろう。」

この種の行為名詞が、相で見れば中道相ならば、ブルガリア語の場合、不定法の補完機能として、名詞化の過程が発展する余地が茲に見いだされよう。山口 [1983] は更にこの種の出勤詞名詞を分類して次のように結論づけている。

「以上の結果（出勤詞名詞）をまとめれば、次のようになるう。

I (1)行為の対象 (2)行為の結果 (4)結果としての状態

(7)行為の場所

II (3)行為の内容 (5)状態

(6)行為そのもの(イ)

III (6)行為そのもの(ロ) (中略)

上掲の I の系列と II の系列とを比較すれば、その相違は、かなりの程度に派生原基たる動詞の語彙的意義に依存していると、思われる。とりわけ II の系列は、行為のプロセスを問題とすることが多いから、いわば不完了体的なアスペクトをもっているといえる。このことは、I と II の系列が、その命名の原理そのものにおいては、必ずしも異なったものではないことを、予測せしめる。そのような原理が何であるかについては、仮説の域を出ることはできないが、筆者はこれを「行為によって生じた状況の変化の総和」と考えたと思う。

(中略)

たとえば「書く」という行為における変化の総和は、「書かれたもの」として現象するであろう。「まく」という行為の総和は、その結果としての「畑」となるに違いない。оучение 「教え」もまた、何を以って「教える」とするかを含めて、оучити 「教える」という行為の「状況の変化」の総体として、観念せられるであろう。即ち「行為の内容」である。」

「行為の内容」は現象に依存するので、アスペクトに応じて行為名詞が創出される。

次例を参照されたい。

人びとはなお急ぐようすもなく歩いていて、話したり、窓べにたたずんだりし

ていた。

— а народ все шел, не *торопясь*, разговаривая, останавливаясь под окнами.

— а хората продължаваха да *връвят*, без да бързат, разговаряха и се спираха под прозорците.

彼は、ユーリヤ・セルゲーエヴナが祈禱式からの帰りにここを通りかかるだろうから、

Он рассчитывал, что Юлия Сергеевна, *возвращаясь* от всенощной, будет проходить мимо,

Разчиташе на *връщане* от черква Юлия Сергеевна да мине отгук,

もくろみでは、夕方その宿泊所にやって来る労働者たちは、5、6コペイカ出しさえすれば、熱いキャベツ汁にパンの定食、暖かくて、乾いたベッドに毛布、服やら靴やらを乾かす場所などにありつけることになっていた。

По его плану рабочий, приходя вечером в ночлежный дом,

Според плана му работникът, дошъл вечерта в ношния приют,

за пять-шесть копеек должен получать порцию горячих щей с хлебом,

теплую, сухую постель с одеялом и место для *просушки* платья и обуви.

за петшест копейки трябва да получи порция гореща чорба с хдяб, топло

сухо легло с одеяло и място за *изсушаване* на дрехите и обувките.

次に回説形の分析であるが、先ずペルフェクトについて考察する。ペルフェクトとはブルガリア語では「過去の行為の現在での残存や現在までの反復、継続を表し、従属文中では主文より前の行為が表現せられる。」とされる。例文を参照されたい。

4) 「この一週間で、お痩せになったというのではないけれど、なんだかしよんぼりなさって」

— и мне показалось, что за эту неделю она не то чтобы *похудела*, а *поблекла*.

— и ми се стори, че за последната седмица тя не *е толкова отслабнала*, колкото *посърнала*.

5) 自分はずいぶんいろいろな目に会ってきたし、苦しんできたので，  
как она много *пережила*, сколько *выстрадала* за все время,

колко *e изстрадала* през всичкото това време, колко много *e преживяла*,

6) 「五人生んで三人亡くすなんて、冗談じゃないわ…」

— Шутка ли пять раз *рожала*, троих *похоронила*…

— Шега ли е, пет пъти *съм раждала*, три *съм погребала*…

ふと気がついたら教会の入口だったのよ。

и не знаю, как *очутилась* на паперти,

и не знам как *съм се намерила* пред вратата на черквата,

7) どんなに長いあいだ待ったかということを話したかった。

рассказать, как он долго *ждал* ее.

да ѝ разкаже колко дълго я *e чакал*.

8) ときにはね、そろそろ産気づいてるってのに、

Бывало, *собираешься* родить,

И това *e ставало* — дойде време да раждам.

9) 口にこそ出さなかったけどね。

хоть и не *высказывал* этого.

макар и да не го *e казвал*.

4)から6)の文では完了体動詞が使用されている。「いろいろな目に会って、苦しむ」「痩せたり、しょんぼりする」「生んだり、亡くす」ような行為もまた、現象との関わりで、幾通りにも言語表現が可能であるが、茲においても発話者が当該言語を通して、現象をどう捉えるかで、表現が規定される。ロシア語の完了体動詞は行為と発話時点を区別しないので、行為の発現から成就をトータルに表現し、ブルガリア語ではペルフェクトを用いることによって発話時点と行為の残存をより鮮明に記述する。

7)から9)の文ではロシア語、ブルガリア語の動詞共に、不完了体が用いられている。茲に主に提示されているのは、行為の現在への継続や経験等である。

アカデミー文法の定義を援用しながら、イエ・プロコポーヴィチ [E. H. Прокопович 1969] はロシア語でも完了体の過去時制が 1) ペルフェクト及び 2) アオリストを表現するのに対して、不完了体の過去時制がインペルフェクトを表現すると述べている。この場合筆者は論点を現在に据えており、特に完了体の場合ペルフェクトに過去の対象の性質的表現(状態)の機能を汲み取っている<sup>(5)</sup>。

次に過去完了の場合であるが、この時制はブルガリア語の場合、「ある過去の時を基準とし、その時まで完了した動作」を表現する。次例を参照されたい。

10) 片側の垣根や門はすっかり闇のなかに沈んでいた。

так что заборы и ворота на одной стороне совершенно *утопали* в потемках;  
 така че оградите и вратите от едната страна *бяха потънали* в мрак;

11) 二カ月ほど前に、姉は癌の手術をして、  
 Месяца два назад у его сестры *вырезали* рак,

Преди два месеца я *бяха оперирали* от рак

12) 白い顎ひげはくしゃくしゃで、髪もたった今起きたように解かしつけてなかった。

Седые бакены у него были *растренаны*, голова не причесана,  
 как будто он только что *встал* с постели.

Прошарените му бакенбарди бяха *разрошени*, главата — *несресана*,  
 сякаш току-що *беше станал* от леглото.

13) 彼女は教会で疲れていた。

Она *утомилась* в церкви,

Беше *се уморила* в черквата

14) 頭がうそ寒いほど髪の毛ももうひどく薄かった。

и волосы у него уже сильно *поредел*, так что зябла голова.

и косите му бяха силно *оредели*, така че главата му *мръзнеше*.

(5) 彼の言うペルフェクトの機能が効率よく発揮されるのは、形容詞派生の対象の性質的状态の変化を意味する動詞である。

- 15) サーシャと叔父とのあいだには、もう以前から暗黙の了解ができていた。  
 Между Сашей и дядей давно уже *установилось* молчаливое соглашение :  
 Между Саша и вуйчо ѝ отдавна вече *се беше утвърдило* мълчаливо съгласие :
- 16) 彼女とふたりの弟は、子どものころと青春時代をピャトニーツカヤ通りの  
 生家の商人の家庭で送った。  
 Детство и юношсть ее и двух братьев *прошли* на Пятницкой улице,  
 в родной купеческой семье.  
 Детството и юношеството ѝ, както и на двамата ѝ братя, *бяха преминали*  
 на улица Пятницкая в семейството на родителите ѝ търговци.
- 17) 嫉妬と涙から病床につくようになったのだろう、と信じていた。  
 и что в постель ее *уложили* ревность и сълзите.  
 и че на легло я *бяха съборили* ревността и сълзите.
- 18) ふと、もうそれと同じ質問を今朝の往診のときにしたような気がして、ど  
 ぎまぎした。  
 и его смущала мысль, что, кажется, эти самые вопросы он уже *задавал*  
 доктору сегодня во время его утреннего визита.  
 Смущаваше го мисълта, че може би *беше вече задавал* същите тези въпроси  
 на доктора днес по време на утринното посещение.
- 19) 月はもう天高くかかって、  
 Луна *стояла* уже высоко,  
 Луната се *беше издигнала* вече високо
- 20) たった今、医学だの宿泊所だの話をしてきたことが恥ずかしかった。  
 Ему было стыдно, что он только что *говорил* о медицине и о ночлежном доме,  
 Срамуваше се, че току-що *беше говорил* за медицина и за нощен нощен прият,
- 21) 三度ばかり彼女は鞭で打たれたことさえあった。  
 и даже раза три *наказывал* ее розгами,  
 и дори два-три пъти я *беше бил* с пръчки,

10)から 17)は共に完了体過去の文章である。これらの例文でも、ブルガリ

ア語の動詞の過去の機能を調べて、ロシア語に当て填めてみると、それぞれ、過去のある時点までの、「状態」「結果」「継続」の終結が看取せられるのである。これに対して、不完了体が用いられている18)から20)の文では、過去のある時点までの、「状態、結果の継続」が見られよう。また21)文には過去のある時点までの、「繰り返される経験」が語られている。この様に、現象に、表現のための中心軸を据えることで、アスペクトの呪縛から逃れられることが諒解せられる。つまり採るべき視点は、「話者の発話に対する『気分』を発話行為の中にどのように汲み取るか」ということである。

ア. シャーフマトフ [A. A. Шахматов 1941] も、ロシア語動詞は現在、過去、未来の各時制に止らず、更にペルフェクトを有しているとし、この場合ペルフェクトは、結局、動作というよりは状態を示すことになる」と述べている。彼の視点が被動形動詞過去に置かれたのに対し、ヴェ. ヴィノグラードフ [B. B. Виноградов 1947] は、同様にペルフェクトが状態を表現するという事実を指摘しつつも、シャーフマトフが挙げた被動形動詞と完了体の過去時制には著しい機能上の相違があるとした。被動形動詞の場合は不特定な主体が存在する可能性がある。過去時制では、これに反して、主体の動作が生起した結果としての状態という側面が明瞭であることを考慮に入れるならば、ヴィノグラードフの指摘は正しい。[山田 1973]

6. 小論では、ロシア語とブルガリア語の動詞における法、アスペクト、時制の機能の多面性が考察された。この問題の煩雑さの原因は、現象とその場面で用いられる動詞の語義が体とどう関わっているか、換言すれば、体を通して現実の動作がどの様に表現されるかという基準が明確でないこと、及び時制によっては或る体の有する意味が凡て表現されるとは限らない点にあると考えられる。これらの問題を解決するためには、人間の発話行為と、それを構成している全ての環境(言語外現象)を分析の対象にする必要がある。人は言語を通して自らの意志を表現するが、その際に重要なことは認識主体が生起する動作を記述する場合に、その主体の心的態度が何らかの形で表現されなければなら

ず、この心的態度を軸として、体と時制が密接な関わりを有していることである。これは井泉 [1956] というところの「気分」の問題をも含むものである。

時制の概念は発話の瞬間を基準にした現象の「先行性」、「同行性」、「追尾性」を表現するに対し、体は動作の瞬間に対するそれらの別であるから、これらの範疇は相互にその機能を補ない合うことになる。ロシア語とブルガリア語の動詞のアスペクトと時制の関係を比較検討し、動詞において歴史的に古形を保ったブルガリア語から見ると、アスペクト（体）の概念が場の意味を形成し、その文脈で時間を発話者がどのように認識しているか、分析することが必要だと思量せられた。

しかし、ブルガリア語動詞のシステムは、これ以外の多くの文法事項と同様に、バルカン諸語の結合という特殊化されたバルカンの言語環境において、出来上がったものである。

動詞の完了体不完了体が普及している、ブルガリア語（部分的にはセルボ・クロアチア語においても）のアオリストとインパーフェクトの対立の維持という事実であるとか、これらの時制のための特殊な再話形の出現、時制組織全体でのこれらの範疇の位置や、それらの機能の特殊性、その他多くのこうした特性は、他のバルカン諸語とトルコ語の資料を比較して得られる、バルカン語の共通性を考慮しないでは、その意味するものを正確に理解することが出来ないのである [E. И. Демина 1993]。今後の課題としたい。

#### 参 考 文 献

- B. Comrie Aspect Cambridge : Cambridge University Press 1976  
 H. Weinrich Tempus Besprochene und erzählte Wert 2 Auflage W. Kohlhammer  
 Stuttgart Berlin Köln Mainz 1971 (邦訳：ヴァインリッヒ 1982 『時制論』 脇坂豊ほか訳紀  
 伊国屋書店)

- Křížková Первичные и вторичные функции и т. наз. транспозиция форм//Travaux linguistique de Prague Akademia Prague Prague 1966 No.2.
- A. A. Шахматов Синтаксис русского языка Изд. 《Учпедгиз》Л. 1941.
- A. B. Бондарко Значения видов русского глагола//Русский язык в национальной школе 1970 No.1
- A. B. Исаченко Грамматический строй русского языка в сопоставлении с словацким ч. 2 Изд. 《Словацкой академии наук》Братислава 1960.
- A. H. Гвоздев Современный русский литературный язык ч. 1 Изд. 《Просвещение》М. 1967.
- A. П. Чехов Избрани творби в осем тома т. 4 Изд. 《Народна култура》София 1988.
- A. П. Чехов Полное собрание сочинений и писем в тридцати томах т. 10 Изд. 《Наука》1977.
- A. Спагис Почему так трудно научить нерусских учащихся видам глагола//Русский язык в национальной школе 1970 No.5.
- АН СССР Русская грамматика Изд. 《Наука》М. 1980.
- B. B. Виноградов Русский язык М.-Л. 1947.
- B. B. Гуревич О значениях глаголов вида в русском языке//Русский язык в школе 1971 No.5.
- E. И. Демина Простые прошедшие времена в болгарском языке в свете 《видовой》теории//Philologia slavica Изд. 《Наука》М. 1993.
- E. H. Прокопович Стилистика частей речи, глагольные словоформы Изд. 《Просвещение》М. 1969.
- Ел. Георгиева и др. Правописен речник на съвременния български книжовен език Изд. 《БАН》София 1983.
- И. К. Бунина История глагольных времен Изд. 《Наука》М. 1970.
- К. Мирчев и др. Историческа граматика на българския език Изд. 《Наука и изкуство》София 1978.
- Л. Андрейчин и др. Български гъжовен речник Второ изд. Изд. 《Наука и изкуство》София 1963.
- О. П. Рассудова Употребление видов глагола в русском языке Изд. 《МГУ》1968.
- С. Л. Корчикова Русский язык Изд. 《Просвещение》М. 1970.
- С. Стоянов Граматика на съвременния български книжовен език т. 2 Изд. 《БАН》София 1983.
- 井泉久之助 「言語構造論」『言語の研究』有信堂 1956
- 金田一真澄 『ロシア語時制論』三省堂 東京 1994.3
- 国広哲弥 「言語の認知的側面」『日本語学』第十四卷第十号 1995.9
- 山口 巖 「スラブ語における非人称受動表現」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第2巻第2号 1981.6
- 山口 巖 「古スラブ語における、所謂行為名詞-n/t-ieの機能について」『京都産業大学国際言語科学研究所所報』第4巻第2号 1983.3
- 山田 勇 「ВИДОВАЯ ОППОЗИЦИЯについて」『香川大学教育学部研究報告』第一部第三十三号 1972
- 山田 勇 「ВИД と ВРЕМЯ の関係について」『香川大学教育学部研究報告』第一部第三十四

号 1973

ア. ペ. チェーホフ「三年」『チェーホフ全集』第七巻 (松下裕訳) 筑摩書房 1988.10